

コミッサオン・チ・フレンチ(小山車込)

「アコーディオンを演奏せよと王は命じた」

チジューカのコミッサオン・チ・フレンチは、なぜ今一度ルイス・ゴンザーガに戴冠させるのか、なぜ今回は荒野の王としての戴冠なのかを解き明かす。ルイス・ゴンザーガのアコーディオンを開き、その魂を開放する。アコーディオンの蛇腹の動きには、ルイス・ゴンザーガが凝縮されている。王様バンザイ！荒野バンザイ！

ヴェーリャ・グワルダ

伝統的な装束で出場

サンバの伝統を表現

メストリ・サーラとポルタ・バンデイラ(第1ペア)(18人のエスコート役を伴う)

マルキーニョとジョバンナ

「ランピアオンとマリア・ボニータ」

北東部の荒野で最も恐れられた人物であるランピアオンは、常にルイス・ゴンザーガを魅了してきた。今回、ランピアオンは最愛の伴侶であるマリア・ボニータを伴って、マルケス・チ・サブカイで王族たちを出迎えるべく踊る。ランピアオンの右腕であるコリスコが率いる警護隊が、このカップルに付き添う。

第1アーラ「ランピアオンの警護隊」

ヴィルグリーノ・フェレイラ・ダ・シウヴァ(通称ランピアオン)は、ペルナンブコ州出身の義賊で、山賊の団を率いて政府に反抗した人物である。しかし、今回、老ルーア(ルイス・ゴンザーガ)のためのお祝いにあたり、この山賊王も祝祭に加わり、配下の山賊たちを王族の警護に任じた。

第1山車(アブリ・アールス)「王族の到着」

世界中の王、王族たちが荒野の王の戴冠の祝祭に駆けつける。皆、この祝祭の招待客であり、出迎いの「ロバのタクシー」に乗って、王国を見物し、荒野の王が旅の中でどうしてあれほど多くのインスピレーションを受けたのかを知ることになる。

DESTAQUE カルラ・オルタ「山賊の王女」

DESTAQUE ジョアン・エウデル「王室付の山賊」

第1部「厳しい人生における全ての幸運が、そこで売りに出ている」

第2アーラ「フルーツ」

さあ、王族のみなさん！甘く美味しい北東部の実りをご賞味あれ。「およそ想像の及ぶ限りの全てをこの大地は与えてくれる」この地で収穫できるフルーツは多すぎて数えきれない。「旬になれば

ばおいしいフルーツが成る／我々がホイホイとれる場所に」。

第 3 アーラ「ペアで踊るバイヤオン」

米とフェイスンという組み合わせは、乾季の馬使いが栄養を取るための民間の知恵から生まれた。この完璧な調理ペアは、王族の口にも合うことだろう。「バイヤオンはそれ自体がいいのだから、それを二人で踊ったらなんとなる！」

DESTACADA・チ・シャオン ヴァレスカ「市場に並ぶスパイス」

第 4 アーラ「ハーブ」

虫下しやばい菌よけのため、あるいは敵から見えなくなる薬湯として、ハーブティーは飲まれてきた、、、そして、王族を魅了するべく、この素晴らしき錬金術が通りで披露される。

第 5 アーラ「エビとカボチャのスープ」

誰もの唾液を分泌させ、いかなる王室の献立に出しても恥じることのない、北東部料理を堂々と代表する料理。誰もこの魅力に抗うことはできない！この美食は、老ルーアの客全員を魅了することだろう。

第 6 アーラ「手工芸」

色づけされた焼き物の水差しは、旅行者たち一特に先人から受け継がれた文化遺産等の土着文化に興味をもった人々の目を惹く。

第 2 山車「市場」

ヘシーフェのサンジョゼ市場に並ぶ品々が、マルケス・デ・サブカイ大市場に運ばれてくる。小屋が並び建ち、手工芸品、ハーブ、フルーツ、野菜、穀物等々が売りに出される。やがて王室の官吏たちもこのサンバ会場における商売と芸術の祭りに加わっていく。

DESTACADA ホゼニ・ブラン「市場の目玉商品」

第 2 部「北東部の文化」

第 7 アーラ「小冊子」

コルノ(寝取られ男)は北東部のフィクション上の不滅の人物像である。おとなしいタイプもあり、包丁を持ち出して地面に切りつけるタイプもあり。ありとあらゆるタイプの寝取られ男が、コルデウと呼ばれる小冊子文学で語られてきた。

DESTACADA・チ・シャオン パトリシア・シェリーダ「ラグ・ドール」

第 8 アーラ「マムレンゴ(人形劇)」

マムレンゴと呼ばれる人形劇もまた、ブラジル北東部における優れた芸術表現のひとつである。コンメディア・デッラルテを起源とするマムレンゴが大通りに現れて、王族にも庶民にも夢を見せる。「話せ、しゃべれ、人形。世界中に笑顔が要るんだ。」

第9 アーラ(バイアーナス)「わら細工」

バイアーナたちが王族に向けて、北東部の伝統的手工芸であるわら細工を披露する。トウモロコシの皮、サトウキビの茎、バナナの葉などの繊維が、(何よりもまず辛抱強い)人々の手を経て芸術に転化する。

第10 アーラ「レースを織る女たち」

王室の官吏たちも、通りで、染めや刺繍に参加する！何代にもわたってレースを織り続けてきた織師たちの手によって、北東部の刺繍芸術は広く普及した。

メストリ・サーラとポルタ・バンデイラ(第2 ペア)

ヴィニシウスとジャケリーニ

「ヴィタリーノ作の像」

名人ヴィタリーノによる焼き物の人形の像に生命が宿り、王族やその随伴者たちのために踊る。

第11 アーラ「焼き物の人形」

名人ヴィタリーノは、北東部の田舎の日常(人々の姿、習俗、習慣)を焼き物の姿に焼き付けた。これら荒れた土地に縛り付けられた強き人々が、本日、王や女王たちを驚かせるべく通りにやってくる。

第3 山車「土から生命が作り出された」

子供のころ、ヴィタリーノは余った粘土で動物を作っていた。後々には、田舎の日常生活を形にして、北東部の厳しい生活を焼き物で不滅のものとした。

DESTACKI ジューベール「焼き物製の美人」

DESTACKI コリント「ヴィタリーノの芸術作品」

第3部 「荒野の奥」

第12 アーラ「雨が降らない時の大地」

「広大なる北東部では、太陽が大地を焼き付けるときには、低地にも高地にも葉っぱひとつも見当たらない。」この荒野で、王室の官吏たちはこうした風景に出会う。干からびた死骸、ウルブ、トカゲ、、、それでもこの土地では、雨を求める熱望が高まり続ける。

第 13 アーラ「マンダカル(サボテン)、山賊の花」

「マンダカルが、乾季に花を咲かせれば、それは荒野に雨が来る兆候」実のところ、このサボテンの一種は、サバンナ的なこの土地の象徴であり、荒野の男の生存への戦いの象徴でもある。

第 14 アーラ(小山車込)「シソ神父、私を導いて」

シセロ(通称シソ)神父が王室の官吏たちをサバンナに案内する。何千もの開拓民が現れ、膨大な信徒群に聖人としてあがめられているこの神父を称賛する。この荒野では「オレのパチン(「おとつあん」神父職についての俗称)に会いに行くんだ」という巡礼者の声を聞くことも多い。

第 15 アーラ(パシスタ)「アスン・プレット(オオコウウチョウ)」

オオコウウチョウのさえずりが聞こえる！ルイス・ゴンザーガとウンベルト・テイシェイラの歌に記録されたこの荒野の鳥が、王室官吏の一行を助ける。

ハイニャ・ダ・バテリア グラシアーニ・バルボーザ 「王室のオオコウウチョウ」

「王家の人たちが荒野の美に魅了されたのがわかる。」この美しい鳥が王室の人々を、雨の後の荒野の牧歌的な風景に案内する。「見渡す限り、美しさばかり。4月の太陽、花盛りの森。」

第 16 アーラ(バテリア)「ボランチ(武装警察)」

北東部の荒野全域にわたって山賊の取り締まりに走り回った武装警察「ボランチ」だが、今夜は誰を追っているわけでもない。今夜の彼らの任務は、通りを進むペースの調整と、誰も歌を飛ばさないようなガッチリガードを行うことにある。

第 17 アーラ「引揚者」

王室の一行は、仕事を求めて北東部の乾燥から逃れてくる移住者たちの列を目撃する。これらの痛々しい引揚者たちの姿、飢えと貧しさにまみれた「厳しい生活」の光景を、忘れ去ることはできない。「財布にしているのは布袋。鍵代わりになるのは結んだ紐だけ。」

第 18 アーラ「馬乗り(牛追い)」

馬乗りたちは、勇敢なセルタネージョ(荒野セルタオンの人々)で、広大なサバンナを駆け巡って牛の群れを追う。農場では、家畜を厩舎に導き入れ、牛に焼印を入れ、囲いや牧草や水飲み場に異常がないか確認し、行方をくらました家畜がいればそれを探して連れ帰る。

第 4 山車「馬乗りたちの集会」

ルイス王は馬乗りたちに命じて、サバンナで殺されたいとこであるハイムンド・ジャコーを偲ぶ集会を6月の第3日曜日に開かせる。これはまた、みんなが信仰に沿い平和とセルタオンの男たちの連帯を願って祈る機会でもある。「えらく寂しい昼下がりのこと。牛たちは鳴きやまない。もう自分

たちを導くことのない、あの馬乗りを惜むかのように。」

第4部「川沿いを走る生命」

第19 アーラ「洗濯女」

おや、まあ！洗濯女たちは、招待客に向けて、サンフランシスコ川の岸辺の日常生活の一面を披露する。

第20 アーラ「サトウキビ」

サトウキビはブラジル経済史上大きな意味を持つ。特に北東部には多くの精製所が作られた。だが、精製施設の近代化はまた、サトウキビ畑で働く人々にさらに厳しい規律を課すようになり、夜明けから日暮れまで畑で働く人々の生活をさらに厳しくしていった。

第21 アーラ「北東部の人種構成」

白人、インディオ、黒人の伝統が混交した姿が通りに現れ、王や女王たちを魅了する。キリスト教の礼拝堂やカンドブレの祭壇で生まれた文化が、サンフランシスコ川沿いの地域に受け継がれ、村や、農場主の邸宅、奴隷小屋で育っていった。

第22 アーラ「トレーの祭り」

インディオたちが宮廷の人々を、ダンスと歌、リズムとメロディから成る、トレーの祭りに誘う。樹皮や根から作られた飲み物がふるまわれる。古い霊を払うべくトランス状態を誘発するものだ。

第23 アーラ「漁師」

漁業は「老シコ」の異名をもつサンフランシスコ川沿いの地方に生きる家族の命の綱である。優れた漁師は、川の水かさが増す時を知っている。川の秘密と川の嘆きを理解している。網を投げろ「さあ老いた漁師よ」。すぐそこに多くの魚がやってくる。きっと君を満足させる。

第5部「山車「サンフランシスコ川は海にぶつかる」

「老シコ」についてはルイス・ゴンザーガがいくつもの忘れられない歌にしている。悪霊を追い払うガーゴイルの像は、やがて小舟を離れ、幸運を願う人々の家に置かれるようになった。

デスタッキ アマンダ・マルケス 「『老シコ』を流れる水」

第5部「さあ繰り出そう。もう夜になるから」

第24 アーラ「マラカトウ」

王室の一行がいよいよ到着する。さあ、心の準備を。ついに祭りが始まる！王たちと王女たちは

向き合って、黒人の祖先たちを称える太鼓の音に合わせて踊る。このチジューカのカーニバルで、ペルナンブコの祭りであるフォウゲードがサプカイの人々を熱くする。まさに通りが「マラカトゥのステップで引火する。」

第 25 アーラ「ヘイザード(王国)」

喧噪の中を王室の一行は進む。今日は「王たちの日」だ。皆で祝おう！ルイス・ゴンザーガの地元ではヘイザード(王国)と呼ばれる、この伝統的なクリスマスの祝祭が今、サプカイにやってきて、幼きイエスの誕生と王たちの訪問を合わせて祝う。

第 26 アーラ「ブンバ・メウ・ボイ」

ブンバ・メウ・ボイも、この祭りを盛り上げるためにやってきた！「やあボイ、やあボイ、、、もうオレも踊るぞ！」ボイはクリスマスやフェスタ・ジュニーナのときに街を練り歩くものだが、遊び心を全面開放するチジューカのカーニバルだから、ボイもカチリーナ(伝統的なカーニバルの女性キャラクター)と一緒に盛り上がるのだ！

第 27 アーラ「トウモロコシ祭り」

王室ご一行の食事のための、トウモロコシを収穫するときとなった！このサンバ会場に、トウモロコシの房が堂々と生えそろう、収穫されるのを待ちわびている。カーニバルの最中に！

第 28 アーラ「パゴーチ・フツソ(ロシアのパゴーチ)」

アコーディオンは王室の祭りをさらに盛り上げる。ロシア皇帝の衛兵までが通りに練り出し、踊り続けている。まさに演奏が止まらない、名人ルーアの「パゴーチ・フツソ」そのものだ。

第 6 山車「フェスタ・ジュニーナ」

北東部のフェスタ・ジュニーナに相応しい人物は、バイヤオンの王をおいて他にない。ウニードス・ダ・チジューカの祭りは、王家の人々が、このアコーディオン弾きルイス・ゴンザーガの生誕 100 年と荒野の王としての戴冠を祝う場所だ。

デスタッキ スージー・ブラジル 「祭りの花嫁」

第 6 部「戴冠の祝典」

第 29 アーラ「ロバこそ我が兄弟」

荒野で最も損な役回りを引き受けてくれているのは、鞭打たれ、脅されて生きるロバだ。しかしながら、祝祭に向かう道すがら、調子のよい「セルタネージョのコンビ」がバイヤオンの王を称えて歌う。「ロバこそ我が兄弟、好むと好まざるとに関わらず、、、」

第 30 アーラ「アーザ・ブランカ(白い翼)」

「アーザ・ブランカ」はブラジルの全時代を通して最大のヒットとなり、全国で様々な演者による録音がなされた。ひとたび世界を席卷したこのメロディが今、サプカイを支配する。人々に抱えあげられて「荒野を舞った」「白い翼さえも」ここに帰り、人々の寂しさを抑え、バイヤオンの王を戴冠へといざなう。

第 31 アーラ「旅空の生活」

ルイス・ゴンザーガは、ペルナンブコのエシュを出て以来、とどまることなく国中を歩き回り続けた。そうして人々の心を掴み、王国を作り上げたのだ。これに因んで、国中を旅する人たちを、完全にセルタオンと化したこの通りに招き入れる。「思い出は荷物に詰め込んで、心は楽しく。」

第 32 アーラ「素晴らしきフォホー」

アコーディオン奏者が蛇腹を動かして、サプカイはさらに熱狂する！どこもかしこもフォホー。通りにいる誰もが脚を突き上げる。バイヤオンの王の音に合わせて。そして、素晴らしきフォホーを踊る。

第 33 アーラ「招待客のお祭り」

招待客たちは、この戴冠の祝祭を大いに楽しむ。ウニードス・ダ・チジューカでなければこのセッティングはできなかった！衣装を着用しなかった人、この通りに来なかった人は、カーニバルを祝えなかった人だ！

第 7 山車「戴冠の祝祭」

「ルーア」はラジオに出演する機会を得て、ブラジルの音楽メディアの伝説となった。ウニードス・ダ・チジューカは、今夜のために用意していたサプライズ・プレゼントを披露する。ルイス王の成功を祝う、三つのケーキ。白い翼はブラジルの空を獲得し、海外へも飛んだ。誕生から 100 年にあたる、この祭りの夜に、「白い翼さえも」クジャクに出会う。「荒野の王」の戴冠のために。